

鹿児島県更生保護女性連盟会長賞

題名：たった一つのあいさつから

霧島市立高千穂小学校 五年 ショア春翔ルーサー

僕は、一年半前に、今すんでいる町に引っ越ししてきました。初めは、近所の人と道であいさつをするぐらいでしたが、大きな声であいさつをしていると、近所の人々がすぐに顔を覚えてくれて話をするようになりました。今では、おやつをたくさんくれるおばあちゃん、さいほうや料理を教えてくれるおばあちゃん、ぼくに色々なことを教えてくれて、急病の時は、病院まで連れていってくれる大家さん。みんなにお礼をしてもまたお礼が返ってくるので、「ありがとう」を大切に伝えるようにしています。

ぼくにとっては、みんながおじいちゃんおばあちゃんのようなそん在です。家族みんながコロナウィルスに感染し、地域の友達や大家さんや周囲の人達に伝えると、すぐにみんなが、食料や飲み物をたくさん持ってきてくれ、とても心配してくれました。

「何か必要なものがあれば言ってね。」と毎日のようにだれかが連絡をくれました。お母さんは、「感謝しかないね、みんなが助けてくれてよかったね」と何度も言っていました。困った時に助けてくれる人がいることは、本当に心強いなと思いました。今、世界中で色々な事が起こっています。コロナウィルスの感せんや、ウクライナの戦争、日本でも元総理大臣の安部さんが銃げきされた事件など、本当にたくさんの心配な出来事が起こっています。でも、ぼくの町はちがいます。困っていたら助け合い、平和で楽しい時間が流れています。安心してくらせる町です。人生は一つのレール、だっ線すると全てがくるい始めます。だっ線しないようにするには、自分のど力と日ごろの行いが必要だと思います。

ぼくの大家さんは、元刑事です。地下鉄サリン事件にも関わり、サリンの入った袋を確認に行った刑事さんです。その時は、袋の中身が、もう毒のサリンであることは知らずにみんなの命を助けるため、事件を解決するために現場にいったそうです。大家さんは、事件の後3日間程記憶がなく、気づいたら病院のベッドの上にいるそうです。自分の命をかけてでも、刑事の仕事をしていた大家さん。だからこんなにも優しく、強い人なんだと思います。そんな人が、ぼくの近くにいることがうれしいです。そして、ぼくの友達のお父さんは、消防士です。消防士の仕事も自分の命をかけてでも、人々を守り、助ける仕事です。

友達も将来の夢は消防士です。人のために命をかけるには、とても覚悟がいると思います。

でも、そういう人達がいるからこそ安心してくらせる町があり平和が守られているのだと思います。

あいさつから始まった、地域の人とのつながり、たった一言のあいさつだけでも元気に相手の顔を見て心をこめてあいさつすると、必ず相手にも元気な気持ち伝わります。ありがとうの一言も、人と人をつなげてくれる大切な言葉です。ぼくは、大人になってもあいさつとありがとうの言葉は大切にしようと思います。今住んでいる町が、この先もずっと平和で安心してらせる町があることを願っています。

終わり

鹿児島県更生保護女性連盟会長賞

題名：チャンスが与えられる社会へ

霧島市立木原中学校 2年 本高 駿斗

「手紙」という映画がある。大学に通う主人公の兄が、主人公の学費の足しにするためお金を盗む目的で民家に入る。その民家の人に見つかり、殺人を犯してしまったために、刑務所に入ることになる。主人公は自分が罪を犯していないのにも関わらず、兄が犯罪者であることが仕事先に知られ、何度も仕事をやめることになる。結婚まで考える恋人がいたが相手の親に反対され、結婚がかなわない。別な女性と結婚して娘が生まれるが、その娘も友達に兄の犯罪のことを噂される。全ては兄が犯した罪のせいだと兄を強く憎み、兄が刑務所に入った当初から続けていた手紙のやりとりがなくなっていくという内容の映画だ。

この映画は加害者に目を向けた映画である。この中で、主人公は罪を犯しているわけではない。しかし、犯罪者の家族に対するバッシングはひどく、彼らは深く傷つくのだと気づいた。

罪を犯した人の社会復帰について調べてみると再犯率が高いことが分かった。出所から五年以内に刑務所に戻る確率は覚せい剤で49.4%、窃盗は45.7%、傷害、暴行は36.1%と高い。

インターネットに、刑務所に入ったことのある人の記事があった。それには、出所後に住む所がなく、仕事もなかなか見つけられない。偏見の目があることが一因という。また、逮捕されると携帯電話を解約できず、そのまま服役中も契約は続く。出所後にその期間の請求をされ、支払うことができないために新たな携帯電話を所有できず、携帯電話がないために仕事を見つけれないという悪循環にも陥る。さらに、犯罪がきっかけで友人や家族との関係が疎遠

となり、住む所や仕事、お金のことを相談できる人もいなくなり、再犯へとつながっていくのだという。映画「手紙」の中でも、加害者家族への社会からの扱いは冷たい。心に傷をおった家族が、出所してきた当人との関係が以前のようにはいかないのは理解できる。だが、加害者家族が社会から冷たい扱いを受ける必要はないはずだ。

僕の祖父は保護司をしている。以前、民生児童委員活動をしていたときに推薦されたということだが、家族からは「怖いからやめてほしい」と反対されたそう。刑務所に入った人は怖いという感覚は誰でももってしまうものなのかもしれない。僕も怖い。

祖父はこれまで十五人の方の面倒を見たそう。祖父の仕事は月二回保釈中の人の相談を聞くという内容だ。話を聞くと、家庭環境で悩んでいる人がたくさんいるそう。相談していく中で、心を開いてくれる人も多いのだが、全く心を開いてくれず、目つきが変わらない人もいて、と祖父は教えてくれた。保護司の仕事は大変だが、同時にやりがいがあるとも言っていた。保護司の仕事はボランティアでやっていることを初めて知り、祖父のすごさが分かった。

罪を犯したとしても、チャンスが与えられる社会であってほしいと思う。やり直したくてもそのチャンスがなければ立ち直ることができない。家族に対してはなおさら、色々な配慮が必要だ。罪を犯した人や罪を犯した人に関わる人をさまざまな方法でサポートできる社会のシステムができたらいと思う。

終わり